

「死ぬ時に思ひ出さない今日という一日」

関戸哲也

どこかのオフィスの屋上。

お昼頃。

舞台下手の奥に休憩する為のベンチがある。

男が片手にサンドイッチを持っていて

女の方が小さいお弁当箱と箸を持ったまま、舞台前に来て何かをじっと見ている。

男 「えーと・・・だから、ちょっとよく分からないんですけど」

女 「だからあそこなの」

男 「どこなんですか」

女 「あそこ。茶色いののちょっとこっち」

男 「ちょっとこっち？・・・ああ、あのプロミスの看板の？」

女 「そっち右じゃないですか。こっちこっち」

男 「あ、その尖ったビルの」

女 「それ行き過ぎです。こっち・・・」

男 「どこ？」

女 「もうあそこ！（指を差す）」

男 「（その指を辿ってみて）あそこ？「高橋商事」って書いてある？ビル？」

女 「違っ！・・・それ奥だから！ええと。あそこ・・・あそのピンあるでしょう？」

男 「ピン？ピンってなんですか？」

女 「ピンですよ。あのピンからずっとこうやって来たところ・・・」

男 「あ、ピンってあその「ラウンド1」？」

女 「そうですそうです」

男 「「ラウンド1」って言うってくださいよ」

女 「わかるかと思って」

男 「そういう目印先に言うってください」

女 「だから、そのピンを」

男 「ってかあっちだったら全然違う方向じゃないですか」

女 「まずはそこから、そこからこう、ずっと右に来ると・・・」

男 「ああ・・・あそこ？・・・あのビル？ああ。灰色の？20階建てぐらいのビル？」

女 「そうですそうです。特徴無いから説明の仕方が難しくて」

男 「（良く見て）えー？」

女 「ね・・・」

男 「（見つけて）あー・・・」

女 「ね・・・」

男 「あ、あれ・・・」

女 「ええ……ね、人いるでしょう？何やってるんですかね」
男 「あー。なんか探してるんですかね」
女 「あそこからなに探すっていうんですか」
男 「……自分家探したり」
女 「あれ柵の外ですよ。柵の外から自分家探したりはしないでしょ」
男 「あれ柵の外ですか」
女 「柵の外です」
男 「柵の中じゃないです？」
女 「柵の外です」
男 「ＣＦＯでも呼んでるんですかね」
女 「だから柵の外で呼ばないでしょう」
男 「えっと……。じゃ……。やっぱり」
女 「飛び降りようとしてるんじゃないですか」
男 「……はあ」
女 「……ええ」

間。

男 「(慌てて) ちょっと大変じゃないですか!」
女 「はあ……」
男 「若い女の子みたいですけど……。あれ、制服ですよ。微妙にこれ……。距離が……」
女 「(ベンチに座って弁当を食べながら) ああ、若いのにね」
男 「ちょちょちょちょ……」
女 「はい？」
男 「何ですか？」
女 「何ですかっていうのは」
男 「なんでお弁当食べてるんですか？」
女 「だってお弁当食べないとお昼終わっちゃうから」
男 「え？あれ、あなたが教えてくれたんですよ」
女 「返答しただけです」
男 「え？」
女 「お昼ご飯食べようと思ったら、あの「ピン」が目に入って、「ああ……。ああいうハシヤいでの感じのところちょっと無理だな」なんて思いながらふっと目線右にしたら女の子が柵の外にいたから思わず「わっ」って……。そしたらあなたが「なんですか」って言うから「屋上に女の子がいます」って。それはわたしが教えたってことですか？違うでしょう？正確にはあなたが聞いてきたのでわたしが返答をしただけです」

男 「それは教えてくれたってことでしょ？」

女 「全然違いますよ。返答っていうのは受動的で、教えるっていうのは能動的な行為でしょう？そこにはこれぐらいの差が・・・」

男 「いや、そんなんでしょう。あの、なんとかしましょうよ」

女 「どうするんですか」

男 「(色々考えてみるも) どうしよう」

と、女、弁当を食べ始める。

男 「ちょっとお弁当食べるのやめましょうよ」

女 「ボヤボヤしてる間に休憩時間終わっちゃうから」

男 「そんな・・・警察に連絡を・・・(ケータイを取り出して) あれ？嘘でしょう？こんな時に！充電・・・！」

女 「(手で男のことを指して) あのー、たまにほら、この屋上でお会いするじゃないですか。でも、お話しするのは初めてだから。人って何を契機に話すようになるか分からないもんです。そんな声されてたんですね」

男 「(遮って) そっちのどうですか？そっちのケータイ！」

女 「あ、ケータイ持ってないんです」

男 「そうなの？」

女 「ええ・・・」

男 「珍しいですね。今どき」

女 「(ちょっとはにかんで) いや、あたしって嫌になるくらい普通なんです」

男 「(聞いておらず) ちょ、どうしよう！電話！」

女 「大丈夫ですよ」

男 「何が大丈夫なんですか」

女 「きつと他に気づいてる人いますって。そこでその人達が連絡してくれてますって」

男 「でも・・・でも、今まさに飛び降りでもしたらどうするんですか？」

女 「それは・・・ま、残念だなーって」

男、出て行こうと。

女 「どこに行くんですか？」

男 「止めに行かないと」

女 「え？」

男 「行くんですよ。向こうのビルまで」

女 「え？あのピンのところの右でしょう？結構かかるんじゃないですか」

男 「え？」

女 「時間。こっから見ると近いように感じますけど、いざ歩いて行こうとすると相当かかるもんなんですよ。駅から「ヨシヅヤ」見えて直ぐじゃんって思っても、いざ歩くと20分ぐらい。きっと向かってる間に落ちて終わりだと思いますよ」

男 「ちよつとそんな言い方！」

女 「あなたアレでしょう？（やってみて）「早まるなっ！」ってやりたいわけでしょう？屋上のドア勢いよくバンって開けて、ヒーローみたいに登場したいわけでしょう。でも、屋上のドア開けたらおそらく早まっちゃった後ですよ。あなたは無人の屋上に「早まるなっ！」ってヒーローみたいに登場することになるんですよ？」

男 「ちよつと考えて戻ってきて、大声で）おいーーーーっ！止めろっ！」

女 「（お弁当食べながら）あー届かないですね」

男 「（もう一度大声で）おーーっ！いっ！」

女 「こっち振り向きもしないもん」

男 「（女に）死ぬなっ！どうやってゼスチャーすれば良いんだろう」

女 「え？」

男 「死ぬなっ！ゼスチャー」

女 「（ゴボウを食べながら）さあ」

男 「（ビルに向かって、首吊る感じでやってみて）死ぬなっ！」

女 「それはもう首吊っちゃってんじゃん」

男 「（首吊ってその後バツテン作ってみて）死ぬなっ！」

女 「それはなんか変身する感じになってますよ」

男 「ちよつとあんたさっきからうるさいよ！」

女 「アドバイスをしてるだけじゃないですか（男の動きを真似して）だってこれは完全になんか変身するポーズでしょう？それ見て人は「ああ自殺止めてるんだ」とは思わないですよ。特に自殺しようとしてる当人はね」

男 「・・・・（大声で）おーーーーっ！いっ！・・・・全然見ないな（大きく手を振る）」

女 「（お弁当を食べながら）あの、やめてもらえませんか？」

男 「何が・・・」

女 「万が一、あの子がこっち見たらどうするんですか」

男 「いや、なんで？僕らが見てるってことを知ったら思いとどまるかも知れないじゃないですか」

女 「いや、もし仮に私たちを見つけて、その後飛んだらですよ、あの子がこの世の最後に見るのが私たちになるじゃないですか」

男 「いや、そんなことさせない為にも・・・」

女 「でも、そういう可能性もあるわけでしょう？あの子がこの世の最後に見るのが私たちって可能性もあるわけでしょう？」

男 「いや、そりゃ、ま、可能性としてはね」

女 「それ、ちょっと耐えられないみたいな」

男 「は？」

女 「ちょっとそれは違うくないですか。なんかそれは重すぎませんか？」

男 「何が違うんですか！何が重いんですか？あなたね、え？ちょっと待って。助けたいって思っていないんですか」

女 「いや、思ってますよ。そりゃ思ってますけどね」

男 「やっぱ変わってますよね」

女 「いや、だから嫌になるくらい普通なんですよ」

男 「変わってますよ。さっきからずっと平気でごぼう食べてるし！」

女 「何回言ったら分かるの！だから、お昼終わっちゃうんだって！」

男 「人が死のうとしての時にゴボウは食べるな！」

女 「なんですか！そのイチャモンは！」

男 「人が死ぬってことの荘厳さと、ゴボウが持つその所帯染みた感じが似合わないって言うてるんですよ」

女 「まあ、頑張って助けられるなら助けたいですけど、でも、でも、人の最後の・・・なんかそういう深いところに関わるみたいなのはやっぱ。夜寝る時に思い出すじゃないですか。彼女の最後の眼差しみたいなもの？それは違うでしょう？」

男 「違わないよ！グズグズしていると本当に飛び降りちゃうから・・・」

女 「もう良くないですか？飛び降りたいって言ってるものは・・・」

男 「は？」

女 「飛び降りたいて言ってるものを無理に止めようとするから歪みが出てくるんですよ。良いじゃないですか。飛び降りたいて言ってるんだから」

男 「彼女はまだ学生なんだ」

女 「・・・」

男 「そうでしょう？制服着てるんだから・・・。彼女のこれからは輝かしい未来が待ってるんだ。だから、そんなことさせちゃダメなんです」

女 「・・・そんなこと言ったら例えば私が学生の時に飛び降りても、今飛び降りても何の違いもないかも分からないです」

男 「は？」

女 「人生なんてそんなものかも。少なくとも私の人生は」

男 「何を言ってるんです」

女 「あのね、こう思ったことありません？今日っていう日は死ぬ時に思い出す1日なんだろうかって」

男 「は？死ぬ時に？」

女 「ええ・・・。本当に何でもなく過ごしてしまった日の終わりに、今日って日は死ぬ時

には思い出さない日なのかも知れないって思ったことないですか。ってことはですよ、それはそんな日は無いってのと変わらないってことなんじゃないですか・・・」

男 「そんな日ばかりでもないでしょう」

女 「そんな日ばかりですよ。私はね！」

男 「・・・」

女 「そんな日ばかりです。会社とウチの往復だけで、家に帰ったらテレビ見て、休みなんか一日中部屋にこもって、そうやって、何十年生きてきました。生きてくってことは私にとつてそういうことです」

男 「でもいつもと違う日だってあるでしょう」

女 「無いんです。ずっと同じなんです。お昼だっていつもここに。事務所でおばさん達と居ると息が詰まるから・・・そしていつものお弁当を・・・。お弁当の中身も一緒なんです。自分で煮付けてきたゴボウです」

男 「いや、それはあなたの生き方であって、あの子とあなたは違うじゃないですか」

女 「そんな違うないんじゃないですか。わたしもあの子も・・・」

男 「・・・」

女 「あなただってそうでしょう？」

男 「何で僕の話になるんですか」

女 「こんな寂しい屋上にたった一人でサンドイッチ食べに来てるって」

男 「僕のことの良いでしょう」

女 「ここでよくお会いするじゃないですか。その度に思ってたんです。ああ・・・この人も会社にいられないんだろうなって」

男 「僕は違うんですよ。あなたと違ってこれでも人生充実してるんだ」

女 「どう充実してるんですか」

男 「何でこんな話になってるんだよ。僕は（向こうのビルを見て）彼女を助けたんですよ！」

女 「あなた充実はしてないですよ」

男 「何で分かるんですか」

女 「頭だってアメリカンになってるわけだし」

男 「はい？・・・何ですかアメリカンって」

女 「だからアメリカン」

男 「なにそれ」

女 「届かないかな」

男 「何のこと。アメリカ人ってこと？」

女 「違う。ブレンドに対してのアメリカン」

男 「何のこと？はつきり言ってよ」

女 「だからよく知りもしない人に「頭薄い」なんていうのは失礼でしょう？だから「頭が

アメリカン」って言ってあげてるんですけど」

男 「ハッキリ言いすぎだよ!」

女 「だからなるべく傷つかなくて済むように、お茶目に言い換えてあげてるんでしょう?」

男 「それはあなたが男だったら殴りかかるレベルで失礼ですよ」

女 「優しさですよ」

男 「どこがだよ」

女 「頭アメリカンのくせに人生が充実してる訳がないんですよ」

男 「やめろ!ちよ、なんでこんな話をしてるんですか!?今話してるのは彼女のこと
で・・・(見てみて) あれ?いない」

女 「は?」

男 「彼女、いませんですか」

女 「え?」

男 「ホラ、あなたと変な話してるばかりに!」

女 「・・・それはそれでしょうがないじゃないですか」

男 「しょうがないよ!ああもう、あんたと話す代わりにどっかで電話借りりや良かったんだ」

女 「間に合わなかったですって・・・」

男 「・・・なんてことだ。知らないウチに飛び降りて」

女 「うん。ま、可哀想ですけどね(ゴボウを食べる)」

男 「ゴボウを食べるな!」

女 「本当にいないんですか?」

男 「だって、いないですよ!ホラ!」

男、改めてビルを見て。

男 「(見てみて) あれ?・・・あれ?どこのビルでしたっけ?」

女 「さっき教えてあげたじゃないですか」

男 「あれ?どれだ?」

女、近づいてきて

女 「だから、あそこの・・・あれ?どこだったっけ?」

男 「プロミスからこう来るところでしょう?」

女 「違う違う茶色のこっち」

男 「こっちでしょう?」

女 「違う違うそれだと尖った方に行っちゃうでしょう」

男 「え？分からないって」

女 「なんの特徴もないビルだから。だから一旦こっちのピンにね」

男 「ああ！もうこのやり取りが鬱陶しい！もうピン良いよ！」

女 「その方が分かり易いんですって！あれ？え？いるじゃないですか」

男 「え？」

女 「ホラ、あそこあそこ・・・」

男 「どこ？」

女 「だからピンから右にずっとこう来ると・・・」

男 「え？もうなに？同じようなビルばかりで」

女 「ピンからこう平行です。こう平行ピンから」

男 「ピンって他に言いようないんですか。あ・・・」

女 「ホラ・・・まだいますよ」

男 「ああ・・・」

女 「もうビックリさせないでくださいよ」

男 「・・・・・・」

女、お弁当を食べる為に後ろのベンチへ戻って。

女 「どうしたんですか。呼ばないんですか？」

男 「・・・・・・」

女 「さっきまであんなにハシャいでたのに」

男 「ハシャいでたって言い方やめてもらえますか」

女 「どうしたんです？」

男 「いや、同じようなビルばかりだなんて思って」

女 「え？」

男 「同じようなビルばかりなんですよね。こっからこうしてみると。どのビルがどれか見分けもつかない・・・。人もそうなんですかね。違ってると、実は全然変わらな
いのかも知れない」

女 「だから言ってるんじゃないですか。あなたも一緒ですよ。そんな頭しといて人生充実
してるわけないって」

男 「頭は関係ないでしょう？」

女 「充実してないでしょう。充実したら一人でこんなとくに居ないでしょう」

男 「それは、あなただってそうでしょう？！会社嫌で、仕事嫌でここに逃げて来てるわけ
でしょう？！」

女 「わたしは逃げてるわけじゃないですから！」

男 「俺は逃げたいよ！」

女 「は？」

男 「逃げられるんだったら逃げたいよ！俺が昼休憩終わりでなにやるか分かりますか？コンビニ回るんですよ！？旅行代理店なのに！」

女 「なんですかそれ」

男 「ま、元々やる気も無かったんですけど、ミスで大きな取引先を失ってからの仕事かね。会社のパンフを、ホラ駅やコンビニにあるじゃないですか。旅行会社のパンフ。それを1日かけて補充と整理するんです。そんな仕事って言えないでしょう。そんな仕事しながら、年下の上司と笑いながら飯食えないでしょう！？」

女 「はぁ……」

男 「同じなんですかね。私もあなたもあの子も、同じようなところにいるんですかね」

女 「……あの……そこ同じにしないでもらえます？」

男 「はぁ!？」

女 「わたしは好きで一人でここに来てるんです！変に誰かに邪魔されたくないの、死ぬ時に思い出しもしない1日を死ぬまで一人で積み重ねていけるように……それだけです！わたしの人生はそれで良いんです」

男 「……あの」

女 「はい？」

男 「あなた、あの子の事、こっからじゃ助けようがないから助けないって言っていましたよね」

女 「はぁ」

男 「もしですよ。わたしがここから飛び降りようとしたらどうしますか」

女 「え？」

男 「助けますか？わたしのこと？」

女 「何言ってるんです」

男 「それとも、無いのと同じ日を過ごしてるんだから、止めたりはしませんか」

女 「それは……」

男 「その通りなんです。わたしもこの先、死ぬ時に思い出す1日が無いんだと思います。きつとそうなんだ。だったら、今でも後でも変わらないんだたら……。今でも……」

女 「……」

男 「止めますか？止めてくれますか、わたしのこと」

女 「……(ニヤニヤしながら) もちろんです」

男 「え？」

女 「(ニヤニヤしながら) それは止めなきゃいけないでしょう」

男 「ちょっと、何をニヤニヤしてるんですか」

女 「いや、その……や、あの……私、なんかそういう場に出くわした事がなくてです
ね、その、そういう時、どんな立ち振る舞いをしていいか分からないみたい……」

男 「あの・・・冗談だって思ってるんですか？」
女 「いや、そんな風には思っていないですけど」
男 「じゃ、止めてみてください」
女 「・・・え？」
男 「心から、わたしを止めてみてください。ニヤニヤしてないでさ！あなたの本気見せてみてください！」

男、フェンスを越え屋上のへりのところに行く。

女 「（笑いながら）やめろ〜」
男 「・・・」
女 「（笑いながら）やめろ〜。早まるな〜！」
男 「・・・」
女 「（笑いながら）まだ人生は終わっちゃいないから・・・（いきなりやめて）ごめんなさい無理だあたし・・・（ゴボウを食べ始める）」
男 「何ですか！」
女 「こんな状況笑わずにはいられないですよ。だって、ええ？なにわたしの猿芝居」
男 「あの、わたし本気なんですけど！」
女 「わたしだって本気ですよ。本気で笑っちゃうから（笑いが止まらないままゴボウを食べ始める）」
男 「だからゴボウ食うなよ！本気なんだって。本気で飛び降りようとしてるんだって！あの子だって自分の人生を哲学的に考えてあんなってんだから」
女 「あの子・・・ああ・・・あなた、あの子と一緒にだって言いたいんですか」
男 「わたしとあの子はそういう哲学的な深い部分で繋がっているんだ」
女 「繋がってはいないと思いますけど」
男 「本当に落ちますよわたし！あの子と一緒に！もう良いんだ！わたしの人生なんか！」
女 「あの」
男 「なんですか」
女 「もう止めたりはしないんでワンクッション挟んで良いですか？」
男 「ワンクッション？」
女 「今から下行って人呼んできますから、その人と喋ってから飛び降りてもらえませんか？」
男 「はあっ!？」
女 「だからあなたの人生で最後に喋ったのがわたしって、それは違うじゃないですか。ここにござう食べに来る時でも思い出しちゃうじゃないですか。それは違いますか？」
男 「何言ってるんだ！」
女 「至極真つ当なことを言ってるつもりですけど」

男 「落ちるぞ！」
女 「ワックション！」
男 「なんだよワックションって！」
女 「(女ビルの方を見て) あっ！……！！！」
男 「(その声びっくりして落ちそうになって) うわああああ……っ！あぶねーっ！あつ
ぶねーっ！なんだよ?!」
女 「あそこ……あのビル！」
男 「なに？」
女 「男の人が……スーパースายア人みたいな金髪の頭の……」
男 「男？(改めてビルの方を見て) ほんとだ。あれも制服？」
女 「遠くからだと見えづらいですけど、制服っぽいですね」
男 「高校生かな。うわあ、遠いのに本当にスーパースายア人みたいな頭してる」
女 「きつと近くで見たらスーパースーパースายア人ですね」
男 「つまらないこと言わなくて良いから」
女 「あんな髪型うらやましいですか？」
男 「ちよつと黙って！」
女 「あれ？ズカズカ近づいてってますけど」
男 「ちよ……ダメだよそんな風に近づいていっちゃあ。万一のことがあったら……お
おいダメだよ！不良！そんな風に近づいちゃ！そういう子はちゃんと繊細に扱わない
と！……あつ！」
女 「あつ！」

かなり長い間。

男 「……あれ……」
女 「チューしてますね」
男 「チューですね」
女 「チューな」
男 「チュー」
女 「男に呼ばれた途端、柵またいで戻っていつて。あれ、チューだと思います」
男 「え？チュー？」
女 「チューです。チュー以外ないですよ」
男 「お……ん？お？ん？って……えっと……え？あれはつまり？」
女 「まあ、高校生が別れ話かなんかで揉めてたんですね」
男 「そうなんですか」
女 「だってホラ……。嬉しそうに出て行きますよ。腕組んで」

男 「ああ・・・」

女 「だから、アレじゃないですか？「死んでやる」かなんか女の子がラインかなんかで言
って、それを受けた男の子がやって来たってことですかね」

男 「それは・・・その終電近くの改札でよく見るみたいな」

女 「なんで泣いてるか分からない女の子と、それを黙って見てる男みたいな」

男 「そんな感じってこと？」

女 「きっとこの後、あそこのラウンド1あたりに行くんじゃないですか？」

男 「ラウンド1」

女 「ええ・・・ラウンド1には、そんなやつらがわんさかいます。ラウンド1はそんな
バカモノどもの吹き溜りです」

男 「・・・哲学的に繋がって・・・」

女 「こっちが慌てる必要なかったですね」

男 「・・・」

女 「どうしますか？」

男 「え？どうしますって何が？」

女 「いや、うん。その、本気って仰ってたから」

男 「・・・」

女 「あ、本気じゃなかったですか」

男 「・・・」

女 「あの、昼休憩もそろそろ終わるんですけど」

男 「・・・」

女 「そこにいたら、私たちがみたいに誰かがあなたのことを見つけてくれるかも知れませ
ね」

男 「・・・・・・・・（フェンスをまたいで急いでこっちにくる）」

男、ぐったりと腰を下ろす。はあはあと肩で息をしている。

女 「もしかしたら今日は死ぬ時に思い出す1日になるかと思ったんですけど、やっぱそう
でもないみたいですわね・・・良かったですね」

男 「何がですか？」

女 「ひとまず死ななかったから・・・（考えて）ん？良かったのかな？」

と、女のケータイに着信が入る。

男 「え？」

女 「（電話に）ああ。分かりました。すぐに降りますので（切る）呼ばれちゃいました。

もうお昼過ぎちゃってますね」

男 「え?・・・」

女 「は?」

男 「いや、だってケータイ・・・持っていないって・・・」

女 「会社用のケータイしか持ってないって意味です。面倒なことになると嫌だなんて思っ
て」

男 「・・・」

女 「(男のサンドイッチに目をやって) それ食べないと。昼からもまたコンビニ行かない
といけないんでしょう?こんなところにとずっといると熱中症になっちゃいますよ。やっぱ
暑いわ(行こうとする)」

男 「あの!」

女 「はい?」

男 「これから仕事戻らずにどっか行きませんか?」

女 「え?」

男 「どこでも良いんです。そうだ、ラウンド1に遊び行きませんか?」

女 「その」

男 「はい?」

女 「面倒くさい事になりませんか?」

男 「・・・なるかも知れないですけど、死ぬ時に、思い出す1日にはなるかも知れません」

女、ちよつと笑ったような。

音楽が高らかに鳴り響いて。

溶暗。